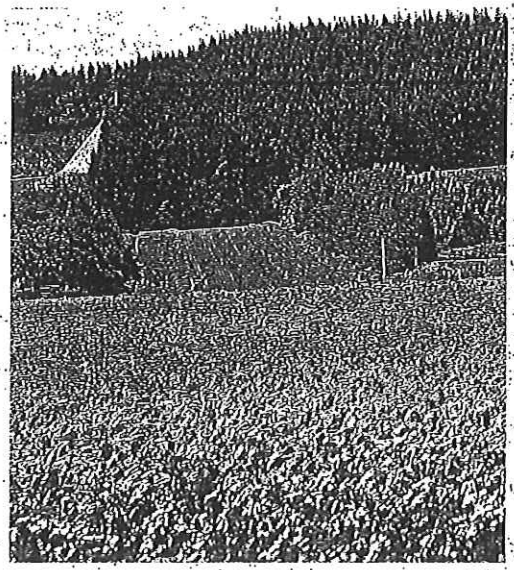
大楽毛物語▼⑨



いじめっ子の阿寒川?

北方防備という移住者の大いなる意図は、時の天も歓迎してくれたのかといえば、全く反対の事態が起きた。

二次移住団が落ちつく間もなく、10月19日の暴風雨で阿寒川があふれ、各支流も軒並み氾濫して耕地一帯が浸水したのである。嫌な雨はジトジトと降り続いて11月に入って連続5日間、冷雨が激しくなって再び阿寒川と支流の水を押し上げ、ついに村の耕地のほとんどが湖沼状態になった。冠水は低地で一メートルをはるかに超え、平坦地でも30センチに達し、滞留すること7日から8日でやっと流失した。せっかく遠方の島根から釧路に来て、初めて収穫期を迎える開拓民にとって、あまりにも冷酷な仕打ちだった。被害作物は馬鈴薯、大根、蕎麦にして…収穫は皆無なり、と報告している。

さらに水害は19年、20年、21年と毎年のように続き、22年12月の出水ではその年の収穫物全部が凍結腐敗し、一個の馬鈴薯、一本の大根すら残らなかった、と「鳥取町誌」が伝えている。水害による移住者といえば、この年11月6日、奈良県十津川郷の移民600戸・2千480人余が空知郡空知太に到着、越冬している。板垣退助、大隈重信、山県有朋が国政を担う時代である。坂本日記に「北方農業に慣れず」とあるが水害が大きな要因だった。

移住後の給与米切れる

移住後2年の間官からの給与米が支給されたものの、期限が切れて生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされた。総代の坂本でさえ、この10日間、イモばかり食っているが「いかんなぁ」と、訪れた役場のイスにべたり込む始末だった。

阿寒川の出水はその後も続き、22年には道庁が4千円を支出して困民救済のために冬場を利用した阿寒川防水のための排水溝を掘らせ、土塁を築かせた。その甲斐もなく前記のように糧食全滅と相なったのだ。

せっかくの収穫物全滅

道庁はこの被害を詳細に伝えた戸長の上申書により、工費9千800円余を支出、23年には穏祢沼の南から延長3千429間、大楽毛川に通ずる分水溝を掘ると同時に、阿寒川筋330間を改修する大工事を起こして村民の緊急対策とした。9年後の32年にも大楽毛川への第2分水溝を掘ったが、阿寒川の氾濫を防ぐ目的と、村民の救済事業であった。

治水工事ご破算大洪水

鳥取士族ばかりではなく、この地方に入植した農民は、寒冷な気候と共に「水」との苦闘を後々まで強いられた。阿寒湖を発して延々と釧路湿原をうねり流れ、旧釧路川へ注ぎ込んでいた阿寒川は、旧釧路川の水かさが増せば、直に溢水、氾濫した。それだけでなく大量の土砂を旧釧路川に流し込み、港湾の浅層化に拍車をかけた。

釧路川治水工事は自然の大地に人々が根付くための歴史的必然性であった。明治45年から着手された治水工事で、わずかの畑と湿原ばかりの一帯は徐々にその姿を変え始めた。湿地が農地に変わる様を人々は喜んだ。

しかしそれも束の間、これまでの工事をすべてご破算にする大洪水が突如として襲って来た。

（つづく）

北海道新聞
購読お申し込みは
フリーダイヤル ヨム ヨ・ドーシン
0120-464-104
または右記販売所へ
㈲丹葉新聞店
釧路市大楽毛5丁目8の1
TEL:57-8228